
市立畑中高校

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

市立畑中高校

【Nコード】

N6513Y

【作者名】

シュウ

【あらすじ】

ここは市立畑中高校、別名・八夕高、玉ねぎ高校。
名前の通り、学校の周りは畑、畑、畑。
しかもその大半が玉ねぎ畑となっている。
近くには牧場もあって、夏になると風向きによって、猛烈な異臭が教室の中に漂ってくることもしばしば。
そんな学校に通う生徒たちは皆、それぞれの青春を謳歌しようと日々生活していた。

はじまりはじまり

残念な授業（前書き）

気を抜いて読んでください。

残念な授業

「きりーつ。礼。着席」

毎日行われる授業。今から数学の時間です。

「よーし。お前ら今日も張り切って勉強するぞー」

生徒に張り切れと言っておきながら自分は怠たるそうな雰囲気全開のこの人は、数学教師の菊池幸太郎。
ヒゲを剃れ。ヒゲを。

「といきたいところだが、先生、教科書を忘れてきた。ちょっと取ってくるわ」

ガラガラ。

そう言ってて教室を出ていく先生。

「じゃあ私が代わりに授業を進めます」

「よっ！待ってましたー！」

「舞子ー。頑張つてー！」

「うん！千代子ちよこ！私頑張る！」

そう言ってて出てきたのは、八汐高三大美女の一人、来須舞子くるすまいこさん。中身と外見のギャップがたまらない、男子にモテるが興味がないうい残念な美人さんです。

ちなみに千代子ちゃんちよこちゃんは舞子さんの幼馴染です。

美しく長い黒髪をかき上げると、一番前の席の子から借りたメガネを装着し、冷静な表情に戻って先生ゴッコを続けます。

「はい。では今日の授業は算数の足し算です」
「まさかの小学生！」

先生が教室を出る機会があると、そのタイミングで毎回のように舞子さんが教壇に立って、おかしな授業をするのがこのクラスの日課です。

舞子先生が黒板にりんごの絵を沢山書いていく。
途中でめんどくさくなったのか、最後の一個はただの丸を描いただけ。

「まず最初に、これはりんごが14個ある場合ですね。そのうちの1つを私が食べます。残りは皆さんが食べます。さて残りはいくつでしょうか？はい。中尾くん」

指名されて立ち上がった短髪長身の男の子。クラスで1位2位を争う頭脳なかおじゅんやの持ち主の中尾純也くん。
しかしながら彼は、勉強ができるだけのバカであるために残念な生徒の一人である。

「りんごはみんなの心の中に残ってます！」

ノリが良くて空気が読める彼はこの場に合った珍解答を瞬時に導き出す。

そこにシビれる憧れろっ！

「正解！！」
「合ってるのかよっ！！」

そのツッコミにクラス内は待ってましたとばかりの爆笑。

まさかの正解にツッコミを入れたのは、このクラスで唯一のツッコミ役の吉田サキちゃん。
このクラスで彼女がいなければ、ただの無法地帯になってしまっほど重要な人物なんです。

「私の正解に異議を唱えるのですか？」

「異議も何も今は俺の授業だから席に戻らんか」

ここで菊池先生の帰還。

舞子さんは聞こえるように舌打ちをしてから自分の席に戻った。

「先生に向かって舌打ちって・・・ゴホン。さあ授業を始めるぞー」

そう言っつていつも通りの授業を進めていく先生。

「しかし先生は普通の授業をせずに、さっきのりんごの問題を解いてしまうのであった」

「うーん・・・このりんごはくって誰だ！変なナレーションを入れたいやつは！」

「はいっ！」

「・・・なんで返事した？」

思わず小声でつつこむサキちゃん。

元氣よく返事したのは、このクラスでぶつちぎりの謎っ子、桑田くわ千代子ちゃん。

舞子さんの幼馴染です。

乗り物酔いがヒドイせいで、毎日徒歩で1時間の距離を通学している。

ちなみに舞子さんも一緒に歩いてきます。

こんな千代子ちゃんのこと舞子さんは大好きなんです。

「先生はこの問題をどう思いますか？」

千代子ちゃんの質問。

「最後のりんごは酷いな」

「ですよー」

ガタンっ！

舞子さんが机に頭を強打しました。

残念な授業（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

前作の「豆乳女と栄養ドリンク男」の次の作品となります。

まったく文章も違う感じで書いてますが、書いてる人は同じです。どう考えても意味不明なようになっていますが、これからもよろしくお願い致します。

時系列はめちゃくちゃになると思います（コラ

というわけで、不定期（一日何回上げるか不明）の更新になりますが、基本は毎日更新を心がけていきたいと思っています。

次回もお楽しみに！

玉ねぎ事件

朝8時10分

学校の生徒たちが次々と登校してくる時間帯。

教室にもいつもの顔ぶれがポツポツと揃ってきていた。ただひとつの違和感を除けば、それはいつもと同じ朝だった。

「な、なんだこれ・・・」

誰もいない教室に一番に足を踏み入れた畑中新十郎^{はたなかしんじゅうろう}。

彼の研ぎ澄まされた、第6感を超えた何かが頭の中に警報を鳴らしている。

この状況は異常だと。

「ここはマズイ！こんなのは俺のノートに書かれていない！」

制服の内ポケットから手帳を取り出すと、なにやらへらへらとめくり出した。

「あれ？新十郎くん？どうしたの？」

背後から聞こえた声に驚いて、バツと後ろを振り向く新十郎。そこに立っていたのは、可愛らしく首をかしげている藤田裕美^{ふじたひろみ}だった。

こう見えてもただ小さいだけで、れっきとした男です。可愛い子ですが、れっきとした男の子です

「驚かすな、藤田」

「それよりさつきからブツブツとどづしたの？」

「ああ。あれを見る。あのことは俺のこの予言書にも書いてないんだ」

「へえー」

藤田くんの手帳を見せる新十郎。

しかしその手帳には目もくれず、適当に返事だけして教室の中をのぞき込んだ。

「これは！……って何あれ？」

「あ！藤田！迂闊に入るな！」

新十郎とは対照的に、教室の中にズカズカと入っていく藤田くん。

「これ……玉ねぎ……だね」

そうです。机の上に玉ねぎが置いてあつたんです。

しかも全員の机の上に。

「誰がこんないたずらを……」

名探偵藤田くんの誕生の瞬間です。

背後には厨二真つ盛りの新十郎がスタンバイしてますが、藤田探偵は気にしていない様子です。

「おはよー！今日も可愛いな！藤田！」

「中尾くん。おはよう」

「よし！その言葉が聞けただけで俺は今日も生きていけます」

「ばんなそかな！」

「あ。サキちゃんもおはよー」

優秀バカの中尾くんとサキちゃんがツッコミ旋風と共に登校。

「って何この玉ねぎ軍団っ！」

「さすが吉田。この状況でもいきなり突っ込むとは。やはりやりおる」

「そんなコメントどうでもいいわ！」

ビシィ！と左手でツッコミを入れた。

「そんなことよりもこの玉ねぎだよ。誰がこんなことをしたのかな

あ？」

「誰だろね？」

首をかしげる藤田探偵とツッコミのサキちゃん。

「おはよー」

教室に三大美女の舞子さんと謎っ子千代子ちゃんが入ってきた。

何も知らない人が二人を見ると、へらへらした社長とその敏腕秘書といった感じ。

「おはよー。そんなことよりこの玉ねぎ見てよ！誰がこんなヒドイ
いたずらを・・・」

「これじゃ玉ねぎ臭くて授業中くさいよねー」

「俺のなんか土ついてるし」

「これは俺のノートにも・・・ってなんか虫出てきたぞ！」

口々に不平不満とかを言う。

「それ私！」

「……え？」

全員が千代子ちゃんを見た。

「どういこと？」

「いやー、今日来るときにいつもより早くてゆっくりしてたら畑で玉ねぎおばさんが登校しちゃってさー。それをみんなにしたわけ」

意味不明である。

中尾くんが舞子ちゃんのほうを向いて言う。

困った時の舞子さんとはよく言ったものだ。

「来須。通訳」

「今日はいつもより1時間も早く出れたからゆっくり歩いてたんだけど、途中で玉ねぎ畑のおばさんが声をかけてきて、玉ねぎたくさん貰ったんだけどこんなにいらなからみんなにおすそわけのつもりで机におきました」

ほぼノーブレスで言うと舞子さんはエヘンと平たい胸を張った。

「そーゆーこと」

隣で千代子ちゃんが胸を張った。

そしてその隣で、肩を落とす藤田探偵であった。

ちよっと探偵とかに憧れるお年頃なんです。

玉ねぎ事件（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。
そして喜び狂います。

こんな感じで好き勝手に書いていきます。
先に言っておきますが、ギャグじゃなくてコメディですからね。
面白おかしくが信条です。

次回もお楽しみに！

可愛いは正義

「あの・・・来須さんいますか？」

「来須？おーい！来須！お客さん！」

教室のドアのところにいる男子呼ばれて、指名を受けた舞子さんがお弁当を食べていた手を止めて立ち上がる。

「千代子。ごめんね。行ってくるね」

「うん。頑張つて！」

「あんなやつ瞬殺よ」

穏やかじゃないことを呟いて、舞子さんが歩いていく。

「それにしても来須つてモテるよなー」

「だよなー。しかも舞子ちゃん自体は男子には全く興味が無いという徹底っぷり」

近くに座っていた可愛い藤田くんと秀才バカの中尾くんが話す。

「じゃあ二人とも舞子ちゃんが好きじゃないの？」

「怖いもん」

声を揃えて言う二人。

舞子さんの中では、

『千代子>>>>>>>>>越えられない壁>>>女の子>>>虫 男子』
という順位が付いている。

クラスのメンバーには多少は優しいが、それも千代子が「クラスの男子とは仲良くしないとダメだよ？」と言った影響なので、千代子

中心社会は変わらない。

「あいつに告白するやつの気がしれないよ。ってもう帰ってきたし」
「おかえりー！」

「ただいま千代子！」
「相変わらず早いな」

「あんなやつ瞬殺って言ったじゃない。一言も喋らせなかったわ」

なんともえげつない・・・

しかしこれが舞子さんの恒例行事なので仕方ないのです。

365日のうち200日ぐらいは告白されている。

それだけ告白が頻繁にあると大変である。

舞子さんは毎回、文字通りの瞬殺劇を繰り広げてます。

その模様を少しだけどうぞ。

「来須ー！呼んでるぞー！」
スタスタ

「あの、来栖さん！」

「断ります。ありえませんが。あなた誰ですか？そもそも私が知らないあなたに対して告白を受けてOKをだすと思ってるんですか？もう少し頭を使って告白してください。仲良くなってるからとか考えているんでしたら千代子より仲良くなったら少し考えてあげます。

それか女の子にでも転生してきたら考えてあげなくもないわ。じゃあ千代子が待ってるので」

「・・・すみませんでした」

ざっとこんなもんです。

マシンガンどころか、ゲームの007を彷彿とさせるようなガトリングガンとロケットランチャーの2つ持ちみたいな感じです。

ようは破壊力と連射力を兼ね備えた最強兵器ですね。
あのゲームは面白かったですね！
モーションセンサーだけにして基地に閉じこもって……

話がそれました。
教室に戻ります。

「舞子ちゃんはどんな人ならOKだすの？」

「え？それはもう徒歩で1時間ぐらいかけて登校してきてるのに笑顔を絶やさなくて可愛くてちよっと守ってあげなきゃって感じでry」長いのでカット。

「ふーん。そんな人いるといいね！」

「グハツ！」

舞子さんがお茶を喉に詰まらせました。

何を隠そうこの千代子ちゃんは舞子さんのことを『ただの幼馴染』
としか見ていないので、舞子さんからの長年に渡るマシンガンアプ
ローチも、全く効果がないのです。

まるで霧に向かってマシンガンを連射しているかのような状態です。

「来須は男だとダメなんだろう？」

「そうね。キモイ」

「自分のことを言われてるわけじゃないのに凄く傷ついた」

「こら舞子ちゃん。友達にそんなこと言っちゃダメでしょ」

「桑田……」

「中尾くん。ごめんなさい」

「それでよろしい」

素直に謝る舞子さん。

ホントに千代子ちゃんには忠実ですね。

「そんなに男がダメって言うなら、藤田はどうなんだ？」

「なんで僕!？」

驚いてウインナーを落とす藤田くん。

そんな姿も可愛いですね。

「そうね・・・」

じつくりと見定める舞子さん。

「藤田くんなら許すわ」

「まさかのOK!行けるって!藤田!行ってみろ!」

「嫌だよ!怖いもん!僕無理だつて!」

まさかの「藤田くんならアリ」発言が出て騒いでる三人を見ながら、千代子ちゃんは笑顔で美味しくお弁当を食べ終わりました。

可愛い正義（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

実はこの話、思ったよりも筆が進まないため、勝手ではありますが不定期連載とさせていただきます。

シュウさんの次回作に期待してください。

一応次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6513y/>

市立畑中高校

2011年11月20日20時08分発行